



複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム

＜日本古代学教育・研究センター＞明治大学大学院文学研究科史学専攻・日本文学専攻

ニューズレター 第24号

◆巻頭言

明治大学文学部教授・総括責任者 石川日出志

スケッチのすすめ

近年いくつかの分野のフィールドワークを紹介する書籍が出版されている。それをみるとスケッチを推奨している場合が少なくない。私も考古学の道に入って以来、観察した遺物や遺構をスケッチするよう心掛けている。略図を描くことには写真では得られない効果がある。

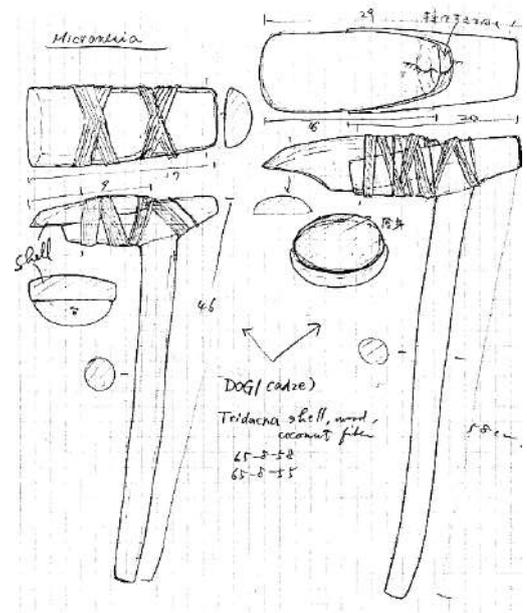
付図は1991年に在外研究でUSAの博物館を訪問した際に、展示を見学した南太平洋地域の民族資料の斧類スケッチ53例の一つ、貝斧である。日本の縄文・弥生時代遺跡から多数の磨製石斧が出土し、斧柄もかなりの例数が知られている。伐採用の斧で、柄に穿たれた孔に石斧が装着された実例もある。しかし、紐類で結わえ縛る構造の斧は、柄に石斧が装着されて出土した実例がないために、その実際を知るのには容易ではない。それには、こうした19世紀末から20世紀前半に世界各地で採集された民族資料の石斧や貝斧が大いに参考になる。

写真撮影してもよいが1991年当時はフィルムなので精細な写真は難しいし、撮影不許可の場合もある。しかしスケッチに制約はなく、それどころか写真以上に有効な記録となる。まず、スケッチするには全体から細部までを詳しく観察する必要がある。これが重要で、柄と斧台（石斧の装着部）の長さ・太さの比率や角度、石斧の形状と斧台への装着状態、紐の巻き方とその位置、さらに

各部位の断面形はどのようになっているかを観察して考える。写真でもある程度の特徴は読み取れるが、スケッチでないと石斧装着部の構造を表現するのは難しい。スケッチを繰り返せば、時間がない場合に資料の特徴を押さえた写真を撮影するようになる。

スケッチは資料理解に利するだけではない。部分と全体を観察し、その構造を復元的・解析的に描く手法は、じつは研究の道筋を整理する場合にも力を発揮する。

考古学界では、B6判より一回り小さい＜野帳＞がよく使われる。しかし、資料の形態情報を正確に表現するには小さすぎるので、私は1990年頃からB5判の方眼ノートを使い始めた。これはと思う製品が次々に販売中止となり、今は＜ツバメノート＞を取り寄せて使っている。巨匠・黒沢明監督も愛用していたという。



1991年5月7日ペンシルヴァニア大学考古学人類学博物館にて：ミクロネシアの貝斧着柄（横斧）資料

目次：

フィールドワーク	
高麗大学校プログラム	2
明治大学・南京大学学術交流会	4
特別公開講義紹介	
南京大学賀雲翱教授特別講演会	5

◆フィールドワーク ◇高麗プログラム

実施日 : 2018年9月3日(月)~7日(金) 4泊5日
 参加人数 : 学生7名 引率者3名 古代研2名 計12名
 実施場所 : 韓国(ソウル)
 〈フィールド調査日程概要〉

- 9/3 羽田空港を出発、ソウル金浦空港到着。ソウル市内見学。
 9/4 ソウル市内見学。
 9/5・6 高麗大学校で学術交流会。
 9/7 ソウル市内見学。金浦空港より出発。羽田空港到着。



◇参加記

博士前期課程2年 中島皓輝

本年度の韓国プログラムは9月3日から7日までの5日間で行われ、文学・歴史学・考古学の各分野から教員・研究員・学生合わせて12名が参加した。

日本から2時間足らずでソウルに到着。初日は大韓民国歴史博物館と国立古宮博物館の見学を行った。前者では19世紀末から現代に至るまでの韓国の歴史が紹介され、後者ではさらに前の時代である朝鮮王朝・大韓帝国の500年に及ぶ歴史が扱われていた。特に古宮博物館では、宮中の煌びやかな様子だけでなく、詳細な絵図面や精巧な水時計などといった朝鮮王朝における科学技術面の発展様相を知ることができ、大変興味深かった。

2日目には戦争記念館を見学した。ここでは古代から現代までの「戦争」について展示がされていた。多くの展示史料の傍には、再現映像での紹介やタッチパネル式の解説などがあり、展示品についてより具体的に知ることができる設備が充実していると感じられた。

午後には文学と歴史学・考古学で別行動をとり、歴史学・考古学チームは蚕室に所在する風納土城・夢村土城を見学した。いずれも三国時代の百済の遺跡で、それぞれ都の周囲をめぐる防壁と緊急時に避難する山城であった。現地で見学できたことで土塁の大きさや、山城の斜面がとても急であることなどが実感を伴って理解された。また、夢村土城内の漢城百済博物館には百済時代を中心とした展示がされ、中でも土城の断面をはぎ取った展示は、古代の土木技術とその後

の修繕の跡とを見て取ることのできる非常に貴重なものであった。

3日目・4日目には高麗大学での国際学術会議が行われた。一日ずつ歴史学と文学の報告が行われ、歴史学分野の筆者は初日に報告を行った。幅広い時代の報告がされる中には、筆者と時



代の近い報告をされた高麗大学の学生がおり、双方で質疑を行うことができた。

他方、文学分野での報告では、歴史学とは性質の異なるものである分、新しい見方を学ぶことができた。中には文学と歴史学とを横断する内容を扱うものもあり、両分野の交流によるさらなる研究の広がりにも興味を抱いた。学術交流以外でも、高麗大学の方に大学内を案内していただいたり、夜には懇親会を設けていただいたりと、報告の場とはまた違った雰囲気の中でお互いの交流を深めることができたと感じられた。

最終日には国立中央博物館に行き、1時間ほど主要展示の解説を行っていただいた後、各自で館内を巡った。広大な館内を古代中心に見学する中では、国宝の仏像の姿形や古墳石室内部に描かれた絵のデザインなど、同時代の日本の文物との共通性を感じさせるものがあり、大変興味深く感じられた。

筆者は今回初めて韓国を訪れたが、各所での見学を通じ古代から現代にいたるまでの歴史を通史的に知ることができた。また高麗大学の学生の方と平安末期における日本と高麗国との関わりについて、お話をすることができたことも貴重な経験であった。今後もこうした学術交流の機会には積極的に参加していければと考えている。

最後に引率の先生方をはじめ、本プログラムに関わったすべての方に感謝し、本稿の結びとしたい。ありがとうございました。



第9回 明治大学 - 高麗大学校 国際学術会議 日・韓国語学・文学と歴史学研究的現況と課題

2018年9月5日(水) 基調講演及び研究発表

10:00	開 会 式	司会: 李定垠 (高麗大学校BK21プラス韓国史事業団研究教授) 開会辞1: 李鎮漢 (高麗大学校BK21プラス韓国史学未来人材養成事業団団長) 開会辞2: 石川日出志 (明治大学文学部教授)			
10:15	基 調 講 演	司会: 李定垠 (高麗大学校) 朴大在 (高麗大学校韓国史学科教授) ●18世紀の日本儒学者の韓国古代史への認識 —『三韓紀略』と『三韓世表』を中心に— 石川日出志 (明治大学) ●中国璽印考古学の可能性			
11:05	研 究 発 表 1	司会: 李定垠 (高麗大学校) 齋藤直樹 (明治大学博士前期課程) ●東日本における埴輪生産体制の成立過程 —A.D. 5~6世紀を中心に— 権昶赫 (高麗大学校韓国史学科博士課程) ●羅唐(唐・新羅)戦争期の買肖城戦闘と新羅の北方戦線	15:00	研 究 発 表 3	司会: ユン・ヒョジョン (高麗大学校) 岩村麻里 (明治大学博士後期課程) ●維新政権における人材登用 —貢士制度の変遷を中心に— 朴晉弘 (高麗大学校韓国史学科博士修了) ●日清戦争期における日本陸軍の朝鮮内軍用電信線の架設
13:20	研 究 発 表 2	司会: ユン・ヒョジョン (高麗大学校BK21プラス韓国史事業団研究教授) 中島皓輝 (明治大学博士前期課程) ●十世紀における衛府の医療体制の検討 —衛府医師の位置づけを中心に— チェ・ウンキュ (高麗大学校韓国史学科博士課程) ●11世紀高麗の日本認識と医師派遣の要請 —「高麗國禮賓省牒大日本國大宰府」を中心に— 金賢東 (高麗大学校韓国史学科修士課程) ●『牧民心書』に表れた茶山丁若鏞の軍政運営策	16:10	研 究 発 表 4	司会: ユン・ヒョジョン (高麗大学校) 李定垠 (高麗大学校) ●ナイロンの流行から見る1950年代の韓国社会 Thomas STOCK (UCLA, PhD) ●北朝鮮思想の歴史を見直す新たな観点 金在元 (高麗大学校韓国史学科博士修了) ●1980年代のソウル市における住宅供給方式の変化と階層間の葛藤 —木洞(モクトン)・上溪洞(サンゲドン)の開発と 立ち退きに遭った住民の闘争を中心に—
17:40	換 抄	司会: 李定垠 (高麗大学校) 挨拶: 宋亮燮 (高麗大学校韓国史学科学科長)			

2018年9月6日(木) 基調講演、企画主題発表及びA組・B組研究発表

10:00	換 抄	司会: 崔暢元 (高麗大学校BK21プラス韓国語文学事業団研究教授)			
10:10	基 調 講 演	司会: 崔暢元 (高麗大学校) 尹在敏 (高麗大学校漢文学科教授) ●一然の『三國遺事』における「金現感虎」の再論 牧野淳司 (明治大学文学部教授) ●日本中世の唱導における女性の問題 —澄憲の『法華経釈』の検討— 鄭雨峰 (高麗大学校国語国文学科教授) ●独立記念館所蔵の『白頭山日記』の作者と意識の向かう先			
11:20	企 画 主 題 発 表	司会: 崔暢元 (高麗大学校) 竹内栄美子 (明治大学文学部教授) ●堀田善衛『広場の孤独』の位置 —1950年代における戦争・文学・政治 李相雨 (高麗大学校国語国文学科教授) ●植民地朝鮮にきた松井須磨子 —芸術座の朝鮮巡業(1915, 1917年)とその影響—			
		A組	B組		
13:10	研 究 発 表 1	司会: 李喜榮 (高麗大学校BK21プラス韓国語文学事業団研究教授) Sean NICHOLSON (明治大学古代学研究所ポスドクター) ●「ツツジ」の名前 —漢字表記を問う— 鄭用健 (高麗大学校国語国文学科博士修了) ●中宗時代の文人の昭陵復位に関する記録の様相とその意味 金紀燁 (高麗大学校国語国文学科博士課程) ●濼洛風漢詩の特性と意象組み合わせの様相 —『濼洛風雅』掲載の漢詩を対象に—	13:10	研 究 発 表 1	司会: 金南赫 (高麗大学校BK21プラス韓国語文学事業団研究教授) 朴知恵 (明治大学古代学研究所研究推進員) ●密通する后、仏教を擁護する后 —『平家物語』における広嗣・玄昉説話をきっかけに— 李京和 (高麗大学校国語国文学科博士修了) ●人魚の説話における力の構造と意味 沈揆植 (高麗大学校国語国文学科博士課程) ●経験と想像: 日韓文学に表れる虎狩りの形象化
14:50	研 究 発 表 2	司会: 李喜榮 (高麗大学校) 鄭秀貞 (高麗大学校国語国文学科博士修了) ●3・1独立運動と劇作家金祐鎮(キム・ウジン) 木村愛美 (明治大学博士後期課程) ●谷崎潤一郎「秘密」論のための覚書 —衣裳が生み出す「秘密」— 尾山真麻 (明治大学博士後期課程) ●太宰治『お伽草紙』論	14:50	研 究 発 表 2	司会: 金南赫 (高麗大学校) イ・ヒョジョン (高麗大学校国語国文学科博士課程) ●「ダルガン(ゆらゆら)歌」のパンソリ的な受容と変異 柳貞蘭 (高麗大学校国語国文学科博士修了) ●主題別分類歌集の再編の様相とその意味 —『時調類聚』、『朝鮮古歌語集』を中心に—
16:30	研 究 発 表 3	司会: 梁泳玉 (高麗大学校BK21プラス韓国語文学事業団研究教授) 安海蓮 (北京中央民族大学朝鮮言語文学学科博士課程) ●中国における朝鮮語教科書の語彙誤訳の分析 —高校の《生物》教科書を中心に— 董春玲 (明治大学博士後期課程) ●遠藤周作文学の研究 —移動から考える	16:00	研 究 発 表 3	司会: 許榮振 (高麗大学校BK21プラス韓国語文学事業団研究教授) 石金愛 (高麗大学校国語国文学科博士課程) ●批判的リテラシーを高めるための 韓国語読み・書き統合タスクの構成に関する研究 青木嶺央 (明治大学博士前期課程) ●安部公房「デンドロカカリヤ」論 —同時代性と芸術運動を視座に—
17:30	閉 会 式	司会: 崔暢元 (高麗大学校) 閉会辞1: 崔鎬哲 (高麗大学校BK21プラス韓国語文学事業団団長) 閉会辞2: 牧野淳司 (明治大学)			

◆南京大学大学院歴史学系との院生学術交流会

実施日 : 2018年7月13日 (金)

実施場所 : 明治大学リバティタワー1092教室

毎年、南京大学大学院歴史学系と明治大学大学院文学研究科および明治大学日本古代学研究所は相互学術交流を重ねている。その一環として2016年から南京大学の大学院生が本学を訪問して本学院生・教員と学術交流会を開催しており、今年で3回目となった。今回は4名が明大を訪問し、7月13日(金)の5・6限にリバティタワー9階1092教室を会場として、南京大学の院生2名の研究発表が行われた。

(1) 衡雪Heng Xue (南京大学大学院修士課程)

「瓷は青白に映え南唐に冠すー考古資料から試読する繁昌窯」(瓷映青白冠南唐ー従考古資料試読繁昌窯)

(2) 張效儒Zhang Xiaoru (南京大学大学院博士課程)

「秦漢より北朝に至る都城における瓦の考古学的研究」(秦漢至北朝都城瓦件的考古学研究)



衡雪さんは、南唐(937-975)代の安徽省繁昌窯の成立と発展過程を論じた。繁昌窯は、素文を主とする白磁・青白磁に特色がある。唐代に「南青北白」と言われたように、淮河流域以北=白磁、それ以南=青磁という分布状況であったが、安徽・繁昌窯と湖北・青山窯製品の流通によって長江流域に青白磁・白磁が分布するようになる。繁昌窯の白磁・青白磁は筒形匣鉢を用いる点と胎土の化学分析から北方系とみられる。繁昌窯の発展は、南唐が政権の要人に北方の人物が多いことや、芸術・文化の発展が基礎となった。繁昌窯はそれまでの「南青」を打破し、のちの景德鎮窯発見の基礎となったと評価した。

質疑では、匣鉢に見られる線刻文字の意味、器物の編年の方法、繁昌窯製品の流通範囲や対外流通の可能性など多岐にわたった。修士課程ながら研究発表は明解で、質疑に対する的確な回答と課題の提示も見事であった。

張效儒さんは、秦漢～北朝代の都城から出土する瓦の研究における可能性と課題を詳論した。張さんは、日本の奈良文化財研究所による研究実践を高く評価して、自身の研究に活かしているという。瓦の研究は、北宋の『造営方式』に始まり、そこに瓦の規格が細かく定めてある点も研究の基本とすることになる。本研究では、瓦の類型学(日本の「型式学」に相当)の基礎に立脚して、瓦の規格と尺度の問題を扱う。具体的には類型ごとのサイズを多数計測して統計的に分析する手法を採っており、その成果と課題を論じた。

質疑では、瓦のサイズが建築物のランクを示すことの実例、歴代尺度が瓦に的確に反映するのか、瓦の乾燥時の収縮の問題などが取り上げられた。中国歴代都城がいずれも著しく大規模であることから統計的研究の困難さも話題となった。にもかかわらず、分析・研究に精緻さをもとめる姿勢が印象的で、今後の研究の発展が期待されるものであった。



終了後は、<やぶ仙>にて懇親の場をもち、筆談を交えながらの意見交換が行われた。また、日本滞在中に一行は、奈良文化財研究所をはじめ、関西圏での資料調査や博物館見学等も行った。(石川日出志)

◆特別講義紹介

◇南京大学賀雲翱教授の特別講演会を開催

日 時：2018年7月26日（木）

講 師：南京大学歴史学院教授・賀雲翱先生

会 場：明治大学駿河台キャンパス グローバルホール

テーマ：「中国南通市如東県掘港における古国清寺の考古学的発見と関連問題の検討」

（中国南通如東掘港古国清寺考古発見及其有関問題探討）

賀教授は、江蘇省如東県古国清寺跡の調査成果を日本において公表することと、その今後の保存と活用を考えるための日本の実情調査を兼ねて如東県関係者とともに来日された。昨秋、私たちが南京大学を訪問した際にその調査概要を伺い、明大での講演計画を立てて、今回国際日本古代学研究クラスター・日本古代学研究所主催として開催し、大学院GP中国プログラムの事前特別講義に組み入れたものである。講演の要旨は以下の通り（講演要旨をさらに要約）。

窯の陶磁器・陶製建築部材・宜興紫砂陶器・石彫・銅銭等がある。陶磁器には“国清”“方丈”“庫司”等の墨書銘があり、ここが唐宋代に国清寺の所在地であったことを証明する。

この南通如東掘港における唐宋代の国清寺遺跡の考古学的発見は極めて重要な歴史・科学・芸術及び文化的価値がある。第一に、唐宋国清寺遺跡は如東の中心的都市である“掘港鎮”の歴史的景観を示す。そして今回の発見は円仁『入唐求法巡礼行記』の記述内容を証明し、日本の遣唐使が掘港国清寺に到着し、その間に中国地方官員の儀礼歓迎を受け、そののち国清寺から乗船して揚州へ、さらに大運河から首都長安へ到達したことなど、重要な歴史の理解に資する。第二に、最下層の三つの大殿建築基礎遺構と唐代石彫蓮華文台座、宋代陶磁器“国清（寺）”墨書銘文は、ここが1200年前の唐代晩期に始建の如東国清寺跡と証明するもので、当時の中国と日本の間で海のシルクロードを経て結ばれた友好関係の重要な歴史的証拠である。この遺跡は、行政当局の理解を得て保存措置が講じられ、博物館建設計画も動き出した。



江蘇省文物局の委託を受けた南京大学歴史学院研究班（代表賀教授）を代表とする研究班は、2015年に江蘇省如東国清寺遺跡で古井戸と唐宋代の陶磁器片を発見した。この発見を受けて南通市及び如東県文化文物部門の委託により、2017年に南京大学は国清寺遺跡に考古学的確認調査を行い、さらに同年末には国家文物局の批准を経て、考古学スタッフを組織し、国清寺遺跡の発掘調査を行った。発掘では唐宋代の国清寺の三つの大殿基礎等の遺構10カ所以上を含む重要な古代建築遺構を検出し、出土遺物は千件近くにもなった。

大殿3基は同一の南北軸線上に築かれており、建築遺構4基・厨房1カ所・井戸3基が付随し、濠がこれらの寺廟を囲む。出土遺物には唐宋代の蓮華文柱礎2件や各地



本講演は、円仁渡唐関連遺跡のことであるだけでなく、唐宋代の東アジア諸国間の文化交流研究に大きな刺激となるものであった。当日は、関東圏の日本・中国古史の研究者が多く出席され、特に國學院大学・鈴木靖民名誉教授からは貴重なコメントを戴いた。なお、7月30日付朝日新聞と8月20日付毎日新聞で本講演内容が報道されたことを補記する。（石川日出志）

明治大学 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

日本古代学教育・研究センター：猿樂町第二校舎3階 TEL:03-3296-4492

E-MAIL jkodaken@meiji.ac.jp ホームページ http://www.meiji.ac.jp/dai_in/arts-letters/jkodaken